

講座 日本語と日本語教育

第7巻 日本語の語彙・意味(下)

編集

宮地 裕

杉藤 美代子

北原 保雄

山口 佳紀

玉村 文郎

武部 良明

加藤 彰彦

辻村 敏樹

崎山 理

近藤 達夫

寺村 秀夫

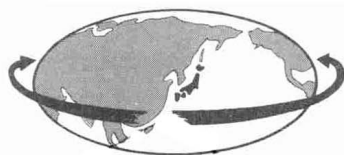
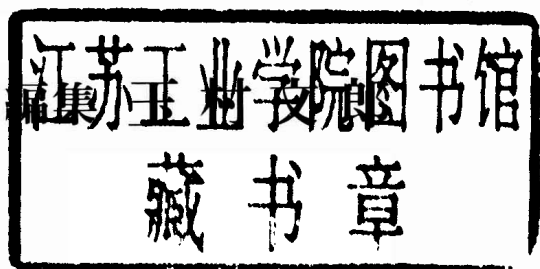
木村 宗男

上野 田鶴子

明治書院

講座 日本語と日本語教育

第7巻 日本語の語彙・意味(下)



明治書院

編者◎玉村文郎

発行者明治書院

代表三樹讓

印刷者大日本法令印刷

代表田中忠

講座
日本語と日本語教育 7

日本語の語彙・意味(下)

平成2年2月25日初版発行
平成10年11月20日再版発行

発行所 株式会社 明治書院

〒100-1005 四

東京都千代田区神田錦町一―一六

電話 (三三三)三七四一(代)

振替 〇〇一三〇一七―四九九一

ISBN4-625-52107-6

製本 星共社

刊行の言葉

言語の研究と教育とは、それぞれ独自の分野であり、それぞれの目的と方法を持つものであるが、一面では、たがいに深くかわりあうものにちがいない。日本語の研究と教育もまた、それぞれ独自でありながら深くかわりあうものである。研究は基礎であって、教育はその応用だと言って済ませられないところがあるように思われる。どの分野でもそうであろうが、とくに言語の研究と教育とは、言語の問題の本質が、人間そのものの、人間の生存や生活や心身のありかた自体に、深く広くかわっているために、相互に格別緊密な関連を持つもののようである。

近年、日本語に焦点を当てた言語の研究が、いわゆる文科系だけでなく、いわゆる理科系の諸方面でもさかんになってきていることは、言うまでもない。それは、科学技術の発達にともなうグローバルな情報交流の展開と無縁ではない。日本語教育も日本の内外で急展開を見せている。少数の外国人が日本語を学習し研究した段

階から見れば、二段階も三段階も進んだところにあると言えるだろう。このたび、教育のうちの日本語教育の分野を取りあげるのはそのためである。歴史もながく、蓄積もおおい国語教育のためにも、よき刺激を与え、参考にもなることを期待している。

日本語研究も日本語教育も細分化が進み、新しい分野と方法がつつぎに開拓されていく。つねに研究・教育の現状を把握し、現在および将来への展望を持つべきわれわれ相互のために役立つような講座でありたいと思う。その道に志を立てたがたにも、分かりやすく有益な講座、そして、深い専門性と広い一般性とを兼ね備えた論考の集積として、困難ではあるが本当の意味での概説・概論・要説・要論の講座でありたいという願いもこめて編集に当たった。日本国際教育協会主催、文部大臣認定の「日本語教育能力検定試験」にチャレンジするかたがたの勉強のためにも、本講座はよき伴侶となるにちがいない。

斯界のために、いささかなりとも寄与するところがあれば幸いである。

平成元年三月

編 者

編者の言葉

集合体である語彙と現象としての意味とは、さまざまに関連しながら、言語の働きを支えている。既刊の第六卷『日本語の語彙・意味(上)』では、いわば語彙・意味の基本的・原理的な事項に関する考察が展開された。第六卷において扱われたテーマ自体は、多く従来の一般の書と異なるものではないが、その内容は斬新で、十分に示唆的であった。このような新しい成果をさらに広め、教育面にも生かすべく企画されたのが、この第七卷である。

第七卷に含まれた一五の論考は、二群に大別できる。すなわち、第六卷の各論または続編と見なされる「意味分野」「語の位相」「擬音語・擬態語」「連語・慣用句」などの論考と、語彙面での巨視的な比較・発想・対照を論じた「日本文化と語彙」「比喻と発想法」「日本語と英語の語彙の対照」などの論考の二群である。

また、別の観点から眺めると、これらの各論考は次の四種に分かつことができるであろう。その一は対照研究に関するもの、その二は教育に直接かわるもの、その三は語の意味と分布に関するもの、その四は比較文化の視点に立つものである。

もちろん、これはあくまでも仮のグルーピングであって、各論考の内容はそれぞれに深く、他の論考と立体的有機的に関連しているものである。

「語彙の対照」は、日本語学習者の多い言語という基準で、本巻では英語・スペイン語・中国語・

朝鮮語の東西の四言語に限ったが、将来はアジア・アフリカ・ヨーロッパの諸言語の語彙との対照篇を加えてまとめられるべきものである。「教育基本語」「語彙指導」「辞書」「術語・専門語」「連語・慣用語」などの諸篇は、国語教育・日本語教育の両分野で共通して問題になる事項を扱っているが、とくに日本語教育面では初級・中級・上級の各レベルにおけるよき指針として役立つものであろう。

「擬音語・擬態語」は、外国人の日本語学習者が異口同音に困難を訴える語群であるため、特別に独立の一篇とした。「意味分野」は第六卷の「類義語・反義語」「定義・命名」などと連続するものであり、「語の位相」は第六卷の「語感」「新語・流行語」、本巻の「辞書」「擬音語・擬態語」との関連が深く、また実践的には「語彙指導」と連続している。「日本文化と語彙」は日本人の意識の中の語彙を照射して、最も巨視的かつ根本的な日本文化論となっている。まさに掉尾を飾る一篇と言うべきである。「短歌・俳句の用語」もまた語彙研究に基づく日本文化論・日本人論になっている。

以上もまた編者一己の捉え方に過ぎない。読者が一層深く、一層有機的に諸篇を関連づけて読まれ、研究と教育のかたとされることを期待したい。

本巻にも、各分野の専門研究者の方々から論考をいただくことができ、創見あふるる一卷を編むことができた。第六巻はもちろんのこと、他の巻ともあわせて活用いただければ幸いである。

目 次

刊行の言葉	1
編者の言葉	iii
日本語と英語の語彙の対照	影山 太郎 一
日本語とスペイン語の語彙の対照	大倉美和子 三七
日本語と中国語の語彙の対照	大河内康憲 四
日本語と朝鮮語の語彙の対照	油谷 幸利 八
教育基本語	加藤 彰彦 一〇六
擬音語・擬態語	日向 茂男 一三
辞書	玉村 文郎 一四

短歌・俳句の用語	寿岳 章子	二七
術語・専門語	阿部 喜充	二〇〇
連語・慣用語	阪田 雪子	二三四
比喩と発想法	中村 明	二五三
意味分野	荻野 綱男	二七六
語の位相	島本 基	二九六
語彙指導	甲斐 睦朗	三三三
日本文化と語彙	板坂 元	三四四
執筆者紹介		三六三

日本語と英語の語彙の対照

影山 太郎

キーワード 一対一比較 過程重視 結果重視 所有表現

一 はじめに

英語の授業で We put all our Christmas cards up round the room. という文を学生に解釈させる
と、「クリスマスカードを部屋中に置く(床に積み上げる)」という訳がでる。put「置く」という
誤った公式に因われて、「部屋の壁にカードを貼る」という解釈が出てきにくい。外国語を学習する
際の誤りはこのような直訳方式に起因する場合が非常に多く、このことから、英語と日本語における
語彙の対照研究は、両言語で対応すると思われる単語を個別に比較するという方法論を採るのが伝統
的である^{注1}。しかし、そういった個々の語の一対一比較と並んで、意味領域や語形成パターンなどの体
系を比較対照する全体的な研究も同等に重要である。本稿では、前者の方法論についてはごく簡単に
触れるだけに留め(第二節)、むしろ後者の体系的比較法に重きを置いて(第三、四節)、日英語の語彙の
相違と類似を述べてみたい。

二 対応語の一对一比較

母語と外国語の対応語といっても、完全に一致することはまずない。指示範囲、ニュアンス、価値判断、位相、共起関係など様々なズレがあるのが普通である。ここでは一例として「どうぞ」と please を比べてみる。

従来、「どうぞ」と please は単なる丁寧表現として片付けられ、辞書でも両者を対応させるだけで済ませていることが多い。しかし、この二つは本当に対応語として位置付けられるのだろうか。例えば受け付け係が客に名前を聞くと、日本語なら「お名前どうぞ」、英語なら *Your name, please.* と言い、その限りでは「どうぞ」と please は一致するように思える。しかし、「コーヒーどうぞ」と *Coffee, please.* では全く異なる意味になる。前者は相手にコーヒーをすすめる言い方だが、後者は自分が飲むための注文である。

一つの考え方として、please と「どうぞ」は基本的に同じ意味であり、右のコーヒーの例のような違いはちょうど「腰」と *waist*、「夕方」と *evening* のような使用範囲のズレに過ぎない、と分析することもできよう。^{註2}しかしながら、「どうぞ」と please の違いは単なる指示範囲の差ではなく、もっと根本的な対立によるものと思われる。

始めに、「どうぞ」の意味を考えよう。それには「どうか」と比較するのが有効である。

よかったら、どうぞ窓をお開け下さい。

* よかったら、どうか窓をお開け下さい。

「よかったら」は相手の都合を聞く表現であり、それが付くと、「どうぞ」はよいが「どうか」は不自然である。

* 私は気分が悪いので、どうぞ窓を開けてください。

私は気分が悪いので、どうか窓を開けてください。

ここでは逆に、相手ではなく自分の都合が問題になっていて、この場合は「どうぞ」は不適切と判断される。先ほどの「コーヒーどうぞ」の例も考え合わせると、「どうぞ」は「あなたの希望どおりにしても私は異存がありません」という意味ではないかと仮定できる。その場合の行為は当然、相手に利益をもたらすような事柄であることが予想される。いわば相手を立てる表現であるから、丁寧という意味合いが生じる。他方、「どうか」は話者自身の利益になる行為を相手にしてくれるようにへりくだってお願いする表現である。

さて、英語の please は、次の例文から窺えるように、「自分の希望がかなうようにお願いする」という意味である。この意味は (a) の prayed, (b) の as a great favor, (c) の begged で明瞭に示されて^{注3}いる。

(a) "Oh, God, please help me," she prayed inwardly. [L]

(b) "As a great favor, Julie," he said, "please don't mention you've seen me." [B]

(c) "Hear me out, please," William begged. [B]

これら依頼、要請、あるいは懇願を表す please は「どうぞ」とは訳せない。むしろ please は「どうか」に対応させる方が妥当であろう。この二つは共に祈願にも使える。

Please be the right number. 「どうか宝くじが当たりますように」

Please don't rain. 「どうか雨が降りませんように」

次の例では、一見「どうぞ」が please と対応するように思えるが、実際はそうではない。

Please come in. 「どうぞ、お入り下さい」

ドアのノックに応えるとき、日本語では「どうぞ」がごく普通である。しかし、英語では please を付けない方が自然であり、Please come in. とすると「お願いですから入ってください」ということになる。この違いは次のような受け答えで一層明瞭になる。

「ペンを貸して下さい」「はい、どうぞ」

“Can I borrow your pen?” “*Yes, please.” (正しいは Sure/Of course/Certainly)
道を譲るときに「お先にどうぞ」

“After you, *please.”

これらは相手の希望を受け入れるという状況であり、「どうぞ」はよいが、please は不適格である。ここで敢えて please を用いると、「お願いですから、私のペンを使ってください／先に進んで下さい」という懇願になってしまう。ここで please と「どうぞ」が正反対の視点を持つことが理解できる。please は、単独でも文の中でも用いられるが、文末に来るときは注意が必要である。

(d) Please take me to Tokyo Station.

(e) (Take me to) Tokyo Station, please.

(d)が通常の依頼であるのに対し、(e)はタクシーの乗客が運転手に行き先を指示する言い方である。この場合、日本語で「*東京駅どうぞ」と言えないことに注意。

(f) Can I please have your name?

(g) Can I have your name, please.

(f)は見知らぬ人に名前を聞かせるようにお願いする表現であるが、他方、(g)は、例えば面接官が役目として応募者に名前を尋ねる言い方である。このように文末に置かれた *please* は△所定の場面を統括するような立場の人が相手に指示を与える▽という特別な意味合いを持つことがある。つまり、相手に行為の実行をうながすわけである。フィジールのピジン英語ではこの種の *please* の代わりに *thanks* が用いられる (Can I have coffee, thanks.) そうだが、行為をうながすことが (前もって) 礼を述べることにつながるのは自然な流れである。(g)の状況では日本語でも「お名前どうぞ」と言えるけれど、それはむしろ応募者の立場に立った表現と解釈され、*please* の話者指向性とは異なる。

本節では、一対一対応の落とし穴の例として「どうぞ／どうか」と *please* を取り上げた。次はいくつかの意味グループの比較に移ろう。

三 動詞の意味特性

英語と日本語を区別する特徴として、従来いくつかの表現様式の相違が指摘されている。まず、日本語が動きを表す動詞を用いるところを、英語では結果状態を表す静止動詞 (be) で表現することが多い。⁴ You're from Kansas City. 「カンザスシティから来たのですね」 Don't be cross with Robert. 「ロバートに腹を立てないで」 (共に Hemingway "The Sun Also Rises" 以下) のような例は日常的に見られる。英語が結果状態を重視する傾向は次のような構文にも反映される。

Boil for 3-4 mins until syrupy.

Whisk egg whites until stiff. [料理書]

これは説明書などに見られる特別の語法と思われるが、untilのあとにいきなり形容詞のsyrupy, stiffが来ている。untilの後の省略はit becomesではなくit isのはずであるから、untilのあとは沸騰させたり泡立てたりした結果状態を述べていることになる。他方、日本語では「シロップ状に／かたくなるまで」のように、必ず「なる」という動きの表現が必要である（*かたいまで）。

△動きV型対△結果V型とは別に、△なるV型と△するV型、あるいは△状況重視V型と△人間重視V型という対立もしばしば提唱される。例えば、財布をなくした人がそれを見つけたとき、日本語では「財布が見つかった」と自動詞的に表現するところを、英語ではI found it.のように他動詞的に言う。

このような表現様式の類型化は研究の方向として適切なものであるが、これまでは比較的狭い意味領域の動詞に限られてきたように思われる。本節では、より広範な意味領域を考察に加えて、上記の類型化を更に一般的な形に整えてみたい。

三―一 移動動詞

先に挙げた「……から来た」とYou are from...という違いは、日本語の動き重視と英語の結果重視の対立を端的に示している。しかしこの対立は「来る」かよかという動詞の選択だけに留まるものではない。ここでは移動動詞に伴う場所表現の形態を考えてみよう。

移動という概念には、どこから（起点）どこを通過（経路）どこに（着点）、という三つの場所

要素が係わっていて、これらは典型的に、英語では from/off/out of, along/across/through, to/into/outo などの前置詞、日本語では「から、に」などの格助詞で表出される。しかしながら、これら特定の前置詞／格助詞を介さずとも、場所表現を直接に動詞の目的語として具現することも動詞によっては可能である。「去る、発つ、退く、出発する、立ち退く」など、起点指向の動詞はほとんどが「町から去る」の構文だけでなく「町を去る」の構文に生じることができ、英語でも leave, escape などは前置詞 from を取らなくてもよい (The bus left the town.)。このように起点表現が動詞の目的語として表された場合、意味的に想定される「から」from の概念は文から消えてしまったのではなく、「去る」leave などの動詞自体に組み込まれていると考えられる。^{注7}つまり、leave the town における leave の意味構造は単にへ移動／でなくへ移動 + from／なのである。このように起点の概念を動詞内部に取り込むことは、言い換えれば、日英両語にとってその概念が重要だということである。逆に、「着く、到着する、入る、接近する、近付く」arrive (at), get (to), reach, enter, approach といった着点指向の動詞はどうだろうか。ここでは日本語が必ず「……に」を明示しなければならぬ(宿に／＊を着く)のに対し、英語の reach, enter, approach は着点を直接目的語として表示することが出来る (enter the castle. ただし名詞になると前置詞が必要: entrance into the castle)。言い換えると、これらの英語動詞は to, into, あるいは toward の概念を意味的に取り込んでいる(例えば enter=go into)。これは、英語が着点(位置移動の結果)を重要視することを物語っている。

他方、日本語が動きを重視することは経路指向の動詞から窺える。日本語には「進む、通る、くぐる、ぬける、登る、下る、辿る、横切る、横断する、通過する、さまよう」など、経路指向の動詞が

豊富にあり、これらは経路を「……を」で表現する。「歩く、走る、泳ぐ、滑る、滑降する、旅行する、散歩する」など様々な移動様態を表す動詞もそうである。英語の *along, through, across* などに対応する格助詞はない。この「を」を特別の△経路▽助詞と考えることも可能であるが、しかしそうすると、「進む」の場合の「を」は経路、先ほどの「去る」の「を」は起点、というように、いろいろな種類の「を」を想定することが必要になってしまう。「穴を掘る」の「を」は産物であり、「穴を埋める」の「を」は対象であるといったことを考え合わせると、「を」自体に無数の意味を区別するよりも、それらの意味合いは動詞そのものの意味から解釈されるとみなす方が合理的である。もし経路の「を」という独立の意味があるのなら、移動動詞だけでなくどのような動詞についてもその意味が成立してもよいはずである。しかし現実には、経路の意味が出るのは「進む」などの移動動詞だけであって、単純な活動を表す動詞について「*舞台を踊る、*公園を遊ぶ」などとは言えない。そこで、経路という意味合いは「を」という助詞ではなく「進む」などの移動動詞そのものに含まれている（「進む」⇨△移動+along⇩）と考えることにする。そうすると、日本語の経路動詞はすべて△経路▽の意味を内包できる——すなわち、日本語には経路の概念が重要である——ということになる。

この点で、英語は対照的である。経路は通常、*along* などの前置詞で表され、直接目的語として表出されるのは日本語ほど普通ではない。必ず経路の概念を取り込む動詞は極めて少ない（*cross the field* (**cross across the field*), *ascend/descend the stairs* (**ascend up/descend down the stairs*))。また、動詞によっては、「経路の全面（端から端まで）をカバーする」という意味合いを特に強調する場合にのみ、経路前置詞を取り込むことが可能である。